

# 武士の一分(いちぶん)

2006(平成18)年12月9日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝山田洋次／原作＝藤沢周平『盲目剣術返し』(文藝春秋刊)／出演＝木村拓哉／檀れい／坂東三津五郎／笹野高史／桃井かおり／小林稔侍／緒形拳(松竹配給／2006年日本映画／121分)

……山田洋次監督の時代劇3部作のフィナーレは、キムタクこと木村拓哉を起用した「シンプル・イズ・ベスト」という言葉がピッタリの完成度の高い作品。前評判倒れでは、と疑っていたのが私の邪心であったことが判明してひと安心……。これで俳優木村拓哉の人生観が大きく変わるかも……。そしてまた、これで一段落をつけた「大御所」山田洋次監督の今後の作品にはいかなる方向性が……？

## 絶賛記事オンパレードの中……

山田洋次監督の時代劇三部作のフィナーレを飾る『武士の一分』は、12月1日の公開以降新聞各紙で盛んに取りあげられている。そこでは曰く「藤沢ワールドの『静と動』シンプルに 濃密に」(12月1日付毎日新聞夕刊)、曰く「木村拓哉が盲目の剣士『目の強さ生きる』」(12月7日付産経新聞)等、絶賛記事のオンパレード……。

元来あまのじゃくの私はそんな記事を読んでいると、今から10年前の1996年に日経新聞の「私の履歴書」に登場したうえ、今年11月からは読売新聞の「時代の証言者」に連載されるほどの立場になり、今や映画界の「大御所」となった感がある山田洋次監督の作品を悪く書ける評論家などいるはずがないと多少斜に構えていた。また予告編で観る限り、木村拓哉が裂帛の気合で刀を右肩に背負うように構えるシーンもどうかなのと、思っていたし、「楊貴妃の再来」と讃えられたという宝塚出身の美女、檀れいの着物姿もそれほどベッピンとは思えないナなど、

色々とケチをつけるネタを探しながら観ることになったが……。

## たしかに役者木村拓哉の力量にビックリ！

SMAPのキムタクこと木村拓哉主演のテレビドラマは高視聴率を稼ぐことで有名だが、私はほとんどそんなモノは観たことがない。他方、彼が出演した映画『2046』（04年）の印象はいまひとつで、作品の出来がいまひとつだったことと併せてあまり印象に残らなかった（『シネマルーム5』359頁参照）。

しかし、『武士の一分』ではキムタクの美男子ぶりは抑えられているものの、山田洋次監督や多くの評論家が言うようにその目力の強さと剣さばきの見事さには、たしかにビックリ。もちろん、彼なりにかなり訓練をしたのだろうが、第1作『たそがれ清兵衛』（02年）の真田広之には及ばないものの、忙しい中よくぞここまでの完成度に達したものと感心。あながち、評論家たちも山田洋次監督に遠慮してキムタクを誉めていたわけではなかったのだと納得……。

## たしかに檀れいの演技力にもビックリ！

新之丞の妻加世を演ずるのは、2005年8月14日に宝塚歌劇団を退団した檀れいだが、映画初出演作は時代劇だけに、「楊貴妃の再来」と言われたその美貌は少し封印……？ その点、同じく宝塚歌劇団を退団して、1986年に映画デビューした黒木瞳が『化身』（86年）で美しいヌード姿を披露してくれたのとは大違い……？ そもそも下級武士の妻という役で映画に出演する以上、派手な動きはなくじっと耐える女という役柄になるのはやむをえないから、そこでその美しさや演技力を観客に示すのはかなり難しいこと……。しかし、檀れいは美しさを封印した代わりに、毒味役というお役目の中で盲目になったことにより、さまざまに揺れ動く新之丞を一貫して支え続けたしっかりとした妻（？）の役を熱演。彼女に対する多くの好意的評論が単なる「楊貴妃の再来」という動機で書かれていたのではないことが実証されたため、私も納得……。

## たしかに「山田組」のその他の役者たちの演技にもビックリ……

映画づくりの「求心力」の根源は監督にあるから、昔から映画づくりの現場で

は〇〇組、△△組とヤクザまがいの名前で呼ばれ、スタッフと俳優を併せたチームワークの良さを競い合っていたもの……？ 今や「大御所」となった山田洋次の「山田組」は、約20年間『寅さん』チームで食ってきたわけだが、渥美清の逝去後、山田監督が新たに挑戦したのが、下級武士の生きザマに焦点をあてた藤沢周平原作の時代劇。

山田洋次の時代劇3部作に結集した俳優陣は、もちろん『寅さん』シリーズとは違う顔ぶれだが、『武士の一分』ではきわめて重要な役となっている新之丞ちゆうげんの中 間徳平を演ずる笹野高史は、『男はつらいよ』の常連俳優。また、お毒見騒動の責任をとって切腹しなければならなくなった気の毒な樋口作之助を演ずる小林稔侍は「時代劇3部作」の常連だし、1度だけの出番ながら重要なシーンに登場する新之丞の剣術の師匠木部孫八郎を演ずる緒形拳は、『隠し剣 鬼の爪』(04年)でも重要な役を演じたベテラン俳優。

さらに、新之丞が嫌っている(?) おしゃべりな叔母波多野以寧を演ずる桃井かおりは、『幸福の黄色いハンカチ』(77年)などで山田組の貴重な戦力となった女優。彼ら彼女ら山田組を支えてきた俳優たちがこの『武士の一分』でそれぞれすばらしい演技力を見せてきっちりと自分の役をこなしていることにもビックリ。

## 例外は坂東三津五郎だけ……

ただ1人「山田組」と無関係な俳優が、日本舞踊の坂東流の家元である坂東三津五郎。彼が演ずるのは、「原作では本当に手当たり次第、女に手を出すという悪い奴」島田藤弥だが、パンフレットによれば、山田洋次監督は島田役には、「昔の時代劇のように、(仇役が) 一目で悪い奴とわかってしまうのはつまらなく、抗いがたい色気を持たせたい」と希望したとのこと。たしかに、坂東三津五郎は本来悪役向きの顔ではなく、正当な主役もしくは準主役向き……。

もっとも、ストーリー上では、番頭ばんがしらの島田は出世のことしか目がな嫌われ者だし、盲目となった新之丞の身の振り方を家老に口添えもしないで、口先だけで加世をたぶらかしていたのだから、かなりのワル。しかし、キムタクにも決して劣らない美男子の坂東三津五郎がそんな役をそのままやってもあまり似合わないのは当然。しかして、果たし合いの場に登場した島田が、「意外にやるな……」

と感じとった後、盲目の新之丞に対してとった戦法とは……？

## たしかに「シンプル・イズ・ベスト」だが……

パンフレットにある吉村英夫氏の『『武士の一分』にみる映画の達成』には「シンプル・イズ・ベスト」という小見出しで、「山田なればこそその真似のできない映画の達成になっている」との絶賛解説が……。たしかに、この解説には何の異存もないし、映画の完成度としてはパーフェクトに近いものだと私も思っている。したがって、この映画は映画大学で「映画製作はかくあるべし」という教材にもベスト……？

ところが、それほどの完成度と感心する反面、私のようなスケベ親父には、加世が島田の屋敷で、島田によって手を押さえ込まれた後のシーンがすべて省略され、また染川町の茶屋の外観は描かれるものの、その内部での出来事が一切省略される山田演出のため、加世が島田によっていかに慰みものにされたのかが、スクリーン上で全く描かれていないことを少し不満に思う面も……。また、この映画のクライマックスとなる最後の新之丞と島田との決闘シーンもシンプルであるが故に、「あのような形」で一瞬でケリが着くことにも、「なぜ島田は盲人相手にあんな戦法を……」と多少不満に思うことも……。もっとも、これはあくまでパーフェクトな完成度を理解したうえで、身勝手な不満……。

## あの時代、あんなことが可能……？

この映画の完成度にケチをつけるつもりはないが、私が1つだけ疑問なのは、染川町の茶屋をラブホテルがわりに使って、島田の加世に対する継続的なエッチの強要がホントに可能だったのかということ……。前述のように、染川町の茶屋の中は一切スクリーン上に登場しないが、先に到着した加世を部屋に案内し、後から頭巾を深く被ってやってきた島田に対して、「お連れ様はいつもの部屋でお待ちですよ」と受付嬢(?)が告げる姿を見ていると、あの時代、そんなことをしていればたちまち島田と加世のうわさが狭い藩内に流れてしまうのではと私は思ってしまったが……。

つまり、現代社会のようなプライバシー情報の保護という観念など存在しない

あの時代においては、茶屋をラブホテルがわりに使って、半強制的に人妻との密通をくり返すなどということは、いくら番頭であっても、いや逆に藩内の誰にでもその顔を知られている番頭という立場では、所詮不可能なのでは……？

## 夫婦愛の主導権は男の専権……？

山田洋次監督の『寅さん』シリーズが嫌いな人はまずいないはずだが、それを観ている女性ファンの多くは、山田洋次監督をフェミニストだと思っているのでは……？ そんな現代に生きる女性ファンの目で観れば、この映画で新之丞が示す妻加世への一方的な離縁宣言はあまりにも女性の人権を無視したもの……？ したがって、そんな無茶を言う（？）新之丞も新之丞なら、黙ってそれに従って直ちに家を出ていく加世も加世……？ もちろん、それは死を覚悟した新之丞が、島田に対して果たし合いを挑むためにやっておかなければならない手続の1つなのだが……。

しかし、この映画では、山田洋次監督のこの下級武士夫婦に対する温かい視点がラストになって展開され、それが多くの女性ファンの感動を呼ぶことに……。

それは「ともに死するをもって、心となす。勝ちはそのなかにあり。必死すなわち生くるなり」という師匠の教えを実践し、見事に島田に一太刀を浴びせた新之丞が自宅に戻ってからの徳平とのやりとり。徳平はそこで「新しく、飯炊き女を雇いたい」と新之丞に相談を持ちかけるのだが、新之丞が「そんなことはおまえに任せる」と答えたのはある意味当然。もちろん、観客はそこでピンとくるのだが、果たして新之丞にもピンときたのかどうかはわからないところがミソ……？

しかして、この映画には三村家の食事風景が再三登場するが、今日の夕食には徳平がつくったまぜ飯だけではなく、煮物の一品が……。盲目となって以来、視覚以外の感覚が研ぎ澄まされた新之丞は、味覚も従前以上に研ぎ澄まされていたようで、たちまちこれは加世がつくったものだど悟ったよう。そこで、新之丞が徳平に命じたのは、「飯炊き女を呼べ！」ということ。そう言われて恐る恐る出てきた飯炊き女は果たして誰……？ そして、今日の夕食をつくった飯炊き女に対して、新之丞はどんな対応を示すのだろうか……？ それは、あなた自身の

目でしっかりと確認し、その感動を味わってもらいたいもの……。

## 大ヒットの予感が……

2006年の今年は興行収入としては日本映画が元気で、興行収入10億円超の映画が30本近くあるうえ、21年ぶりに洋画よりも日本映画の興行収入が上回る勢い。その原因の第1は、ハリウッド映画が『ハリー・ポッター』『パイレーツ・オブ・カリビアン』『ナルニア国物語』などの「シリーズ頼み」となり、話題作・大ヒット作が少ないこと。ちなみに、『ダ・ヴィンチ・コード』（06年）も興行収入100億円に届かなかったとのこと。第2は、71億円と今年最大のヒットとなった『LIMIT OF LOVE 海猿』（06年）に代表されるようにテレビ局が製作し、テレビの宣伝で観客を集めて大ヒットする映画が増えてきたこと。したがって、今年の世界映画の興行収入の伸びは、必ずしも良質な日本映画が次々とつくり出されたためと言えないことは明らか。そのことは、カンヌ、ベルリン、モスクワという3大映画祭で、昨年に続いて日本映画が1本も主要賞を受賞できなかった結果からも明らか……。

そんな中、2006年末に公開されたこの『武士の一分』は興行収入10億円は確実に、ひょっとすると50億円と言われている。また、久々のアピール力のある日本映画だから、クリント・イーストウッド監督の『父親たちの星条旗』『硫黄島からの手紙』と共に、賞取りレースの展開と興行収入の伸びに注目したいものだ。

2006(平成18)年12月11日記